天理市街地のイチョウ並木について思うこと

おやさと研究所教授
佐藤　孝則　*Takanori Sato*

親里大路のイチョウ並木が甦ってきた（図１）。何となく懐かしい思いがする。近年、“黄葉”真っ盛りの 11 月になると、カメラを片手に黄色の絨毯と化した歩道や車道を、写真におさめようとする人が増えてきた。喜ばしいことである。

昨秋、ウエディングドレスを着た花嫁と寄り添う新郎のツーショットを、わざわざ親里大路の黄色い絨毯の歩道で撮影するイベントがおこなわれた。微笑ましい風景である。落葉が厚さ５cm ほど積もった 10 数年前の親里大路の歩道を、懐かしく思い起こした。

図１．親里大路のイチョウ並木（2017 年 11 月 16 日）。

2004（平成 16）年６月、私が理事長を務める NPO 法人 環境市民ネットワーク天理は、天理市内の街路樹現況調査をおこない、3,260 本を確認した。その結果を、樹種ごとに市街地図に落としたのが、図２である。

最も多かった樹種はイチョウ（931 本）で、次にトウカエデ（794 本）、ナンキンハゼ（792 本）、サクラ（498 本）、ケヤキ（99 本）、モミジバフウ（82 本）、ヤマモモ（39 本）、クスノキ（29 本）と続いた。図２に示したように、街路樹（並木）には、道路の区間ごとに異なった樹種が植栽されていた。

そもそも、環境市民ネットワーク天理が市街地で樹木調査を始めたのは、道路沿いの街路樹に異変が現れたからである。

図２．天理市街地の樹種別街路樹の分布状況。

21 世紀に入って間もないころから、天理市内の国道 169 号線沿いの並木が、強剪定によって必要以上に枝が切断され、美観がどんどん損なわれるようになってきた。並木の景観が予想以上に悪化してきたばかりでなく、むしろもがき苦しむ並木の姿を直視できなくなってきたのである。

木々は、樹種によって特徴ある樹形、樹冠を形成することがある。言い換えると、樹形、樹冠で樹種を見分けられることがある。そのため、樹種の特徴を生かして剪定するのが一般的だ。しかし、造園の専門家でない非専門家が作業をおこなうと、どの木々も同じような樹形、樹冠になってしまう。しかも、樹種に応じた「透かし剪定」の技術は使われず、見よう見まねの自己流でおこなわれと、見るも無惨な結果になるのである。さらに強剪定が進むと、いわゆるお菓子の「ポッキー」のように、電信柱に瘤がついたような形状になり、瘤の周囲から小枝や葉が出ることになる（図３）。この剪定の仕方は、奈良県内で 10 年ほど前から最近まで、ふつうにおこなわれていた。

天理市内だけでなく、奈良県内のあちこちでこれまで強剪定がおこなわれてきたが、天理市内で最初に「透かし剪定」が始まり、樹形が戻り始めると、県内のあちこちでは「天理方式」が一つのモデルとなって広がった。今ではあちこちの街路樹で採用されるようになっている。

図３．親里大路のイチョウ並木（2006 年７月 13 日）。

強い剪定を受けたイチョウは、生きていくために瘤状の枝周辺に小枝や葉をつけ、少しでも光合成をおこなって栄養物を生成しようと必死になる。もしも生成できないと、イチョウは栄養物を分解して化学エネルギー（ATP）を生産できなくなってしまう。それは死を意味する。そのため、葉で栄養物を生産できないと、今度は根からの吸収を試みようとする。その結果が、歩道の盛り上がり現象である。

イチョウの根は、栄養物を求めて地中を這いずり回る時に、歩道を盛り上げるのである。つまり、イチョウは強剪定のため弱まってくると、幹から直接小さな葉を出し、その後で歩道を盛り上げるのである。このパターンは、イチョウにとっての「黄信号」を意味する。まさにそのパターンは、人間への「ヘルプ・メッセージ」なのである。

残念ながら、その後、枯死するイチョウが天理市内でも顕在化し始めた。奇しくも、21 世紀に入って間もない頃は、地球温暖化の影響が著しくなってきた時期で、日本全体が酷暑に悩まされていた時期だった。とくに 2007 年８月 16 日は、日本各地で 40℃を超える酷暑日が続いた時期だった。まさに、弱ったイチョウにとっては、“泣きっ面にハチ”の状態だった。

そもそも、「親里大路」にイチョウの木が初めて植えられたのは、大阪の「御堂筋」に初めてイチョウが植栽された昭和８年の翌年、すなわち 1934（昭和９）年だとされている。その植栽は、中山正善天理教二代真柱の意向によって実現したのである。それは、今から 80 年以上前のことである。